

土木屋の読書と旅 (23)

令和6年7月

山口市にある維新記念公園の東端一帯には曲行する溪流越しに緩やかな丘陵からなる緑地があり、木立の中の開けた空間に孔子と弟子たちの群像がある。山口県と中国・山東省との友好協定締結 25 周年を記念して、平成 19 年に設置された『孔子杏壇講学像』である。群像は師である「孔子」を中心に高名な弟子たちが囲む。山東省からの碑銘によれば、向かって左から冉求(ぜんきゅう)、子路(しろ)、顔回(がんかい)、孔子、曾参(そうしん)、子貢(しこう)である。

*山東省の曲阜は省都済南の南 130km 程のところであり、春秋時代(B.C.500 年頃)の魯の国の都であり、孔子が生まれ、活躍した場所でもある。

ここで一つの単純な問いが頭に浮かぶ、なぜのこの5名が弟子の代表なのだろうか。高校で漢文は習ったが浅学の極みか、顔回、子路、子貢は『論語』の登場人物であることはわかるが、冉求、曾参が分からない。

「論語に学ぶ会」のホームページ等を参考にすると、「孔子には 3000 人の弟子がいたとされるが、弟子列伝に名前があげられているのが 77 人。そのうち特に優れた 10 人を孔門十哲という。」この基準を単純に当てはめると曾参(そうしん)のみが当てはまらない。また、席順を考えると上位から順に、孔子⇒ 顔回・子路(一体の像としてつくられている)⇒ 曾参⇒ 子貢⇒ 冉求 となるが、現代の中国人の評価はこうなのか？

日本大百科全書(ニッポニカ)の孔門十哲の項には上述のような記述に続き『この 10 人を孔門中の優秀者と考えると十哲の名称を与えたのは唐代から始まるようである。しかし、ほかにも曾参(そうしん)、子張(しちょう)、有若(ゆうじゃく)らの優れた弟子がいるので、十哲と限定することはのちの学者の議論を招いた。とくに曾参が含まれないことに宋儒(そうじゆ：宋代の儒者の総称)の不満が起こり…』とあることで納得する。

また「論語に学ぶ会」の弟子一覧表には次のような一言紹介がある。

[顔回] 納得のいくまで努力精進する顔淵。 (姓)顔 (名)回 (字)あざな(子)淵 (通称)顔淵：十哲

[子路] 一本木で勇敢な子路。 (姓)仲 (名)由 (字)子路 (通称)季路：十哲

[曾参] 不器用で愚直一徹。 (姓)曾 (名)参 (字)子輿 (通称)曾子：*

[冉求] 六芸に通じ政治手腕にたけた冉有。

(姓)冉 (名)求 (字)子有 (通称)冉有：十哲

注 六芸(りくげい)：官吏になるために必修の礼・楽・射・御(馬術)・書・数

[子貢] 頭が切れて弁が立つ子貢。 (姓)端木 (名)賜 (字)子貢 (通称)なし：十哲

[杏壇きょうだん] 孔子が学を講じたところ。今の曲阜の孔子廟の中にある。『図説孔子』孔祥林(著) ⇒



土木屋の読書と旅 (23)

令和6年7月

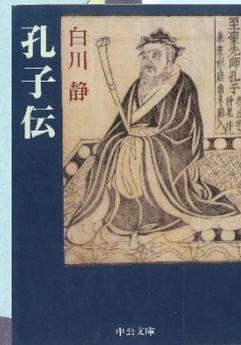
* * *

『陋巷に在り <全13巻> (新潮社)』酒見賢一：『後宮小説』で第1回日本ファンタジーノベル大賞、第102回直木賞候補となる。その他『墨攻』『周公旦 (新田次郎文学賞受賞)』『泣き虫弱虫諸葛孔明』など。2023年11月逝去。

主人公は孔子が最も愛した一番弟子の顔回であり、”陋巷に在り”とは顔回が狭くむさくるしい街に生涯住みつづけたことを指す。諸星大二郎が描く表紙イラストが暗示する如く、おどろおどろしさも漂うファンタジー(幻想的)小説ではあるが、基本的な文献を踏まえたうえで物語を構成しているものと思われる。紀元前500年頃の春秋時代、魯の国・曲阜を中心に展開する話であるが、現在読了したのは第8巻までであるので、物語の帰結先は分かっていない。この本の主役はあくまでも顔回であり、孔子はわき役である。ハマれば面白い本である。

著者の酒見氏は“Book Club 回”のインタビュー記事の中で、次のように語っている。「何かを知りたいと思った時、どのように本を探されるのですか」との問いに「どうしても欲しいと思ったら注文します。でも絶版だといわれることも多い。本当は興味を持った本はすぐ買っとくべきです。すぐなくなっちゃいますから。ただこういう本はおおむね高いですから、なかなか買えないんですよ。それで後で後悔する。またタイトルがかっこいいんです、この手の本は。今の『陋巷に在り』に関しては、白川静先生の『孔子伝』というのが非常に面白かったです。加地伸行さんの『孔子』も」

* 『孔子伝』白川静 (中公文庫)、『論語』加地伸行 (講談社学術文庫) はどちらも県立図書館で貸出可



余談である。上記の『孔子伝』白川静 (中公文庫) の解説を、『論語』(講談社学術文庫) の著者・加地伸行が書いている。その中に記された大学紛争混乱期における白川教授の在りし日の姿はまるで春秋

土木屋の読書と旅 (23)

令和6年7月

時代の孔子のようにも思える。大学紛争を知らない若き人のために少し長くなるが一部抜粋したい。

『昭和四十三年ごろから四十六年あたりにかけて、全国の多くの大学において大学紛争と呼ばれる事件があった。…静かだった学園は騒然となり、諸秩序が揺らぎ、乱世を思わせる日々が続いた。当時、作家の高橋和巳（故人）は、京都大学に在籍し、中国文学を講じていたが、紛争末期のころ、次のような文章を書いた。……立命館大学で中国文学を研究されるS教授の研究室は、…紛争の全期間中、全学封鎖の際も、研究室のある建物の一時封鎖の際も、それまでと全く同様、午後十一時まで煌々と電気がついていて、地味な研究に励まれ続けていると聞く。…学生たちにはそのたった一つの部屋の窓明かりが気になって仕方がない。その教授はもともと多弁の人ではなく、また学生たちの諸党派のどれかに共感的な人でもない。しかし、その教授が団交の席に出席すれば、一瞬、雰囲気が変わるといふ。無言の、しかし確かに存在する学問の威厳を学生が感じてしまうからだ。たった一人の偉丈夫の存在がその大学の、いや少なくともその学部の抗争の思想的次元を押し上げるといふこともありうる。……



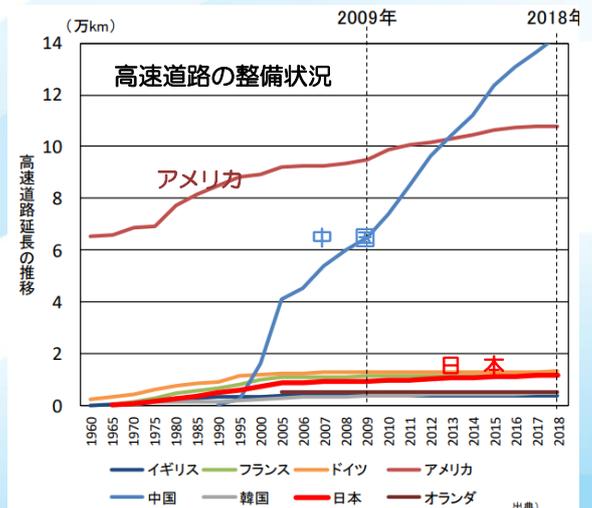
この文中のS教授とは、本書の著者、白川静先生のことである。私が高橋氏の文章を引いたのには、二つの意味がある。一つは、白川先生の人となりがどういふものであるのかということがよく分かるためである。…紛争が長引き、教員は心身ともに疲れていた。にもかかわらず、あの雰囲気の中で、白川先生が研究を中断されなかったことを知った時、われわれ中国学者は肅然とした。いま一つの意味は、本書『孔子伝』が、あの大学紛争の終焉のあたりに登場したことである。……白川先生は、大学紛争のころのマルキスト（日本共産党系も新左翼系も含めて）の浮薄な言動に対して、学問を通じて、具体的には『孔子伝』を通じて、静かに批判を書き続けておられたのではないだろうか。

…(「孔子伝」加地伸行の解説文より抜粋)

* * *

私は県庁職員時代に、友好協定に基づく山東省からの視察・訪問団への対応を2度したことがある。

1度目は協定締結直後の昭和57年頃、私は20代後半の道路建設課橋梁係の技師、訪問団の副団長がチームリーダーでその他ベテラン技術者と若手技術者及び30代の女性通訳からなるグループで来県、視察希望先はコンクリートおよびアスファルトのプラントであった。山東省では今盛んに高速道路を建設中と聞いた。少し腹の出た温厚なベテラン技師と偉丈夫な若手技師ともに李さんだったので、ベテランを老李（ラオ・リー）若手を少李（シャオ・リー）と呼ぶことになった。初日、山口県の道路整備状況の現地視察のため、マイクロバスで下関に向かって中国縦貫自動車道を走行中の時のことである。ラオ・リーが言った「高速道路にしては、カーブも勾配もきついですね」一瞬うっとなったが、当時は新全総(昭和44年～)：計画延長約9,000kmの時代、山口県で唯一供用していたのが中国縦貫道。その規格は1種3級、設計速度80km/h、最小曲線半径280m(望ましい値400m)、最急こう配4%である



土木屋の読書と旅 (23)

令和6年7月

ことを説明した。また、高速道路建設の事業進捗が遅いことについては事業費確保と用地買収の難しさを説明したが、特に用地買収の停滞状況については???怪訝な顔をしていた。視察お別れの宴では、男性3名は凛々しい人民服姿で出席された。遠目では分からないが、一献捧げるため近づくと副団長とその他2名との間の人民服の生地の違いは一目瞭然であり、中華人民共和国での階級差とはこう云うものかと納得した。2度目は平成7(1995)年頃、私は道路建設課企画調査係長で、日本の道路行政は第11次道路整備計画の真っ最中。高規格幹線道路網計画 14,000km/h に加えて地域高規格道路の区間指定がはじまった時代である。視察希望先は高速自動車道路の維持管理施設であり、道路公団広島管理局へ視察依頼することで対応は終わった。当初訪問から13年で高速道路管理のノウハウが必要となるほど、山東省では猛烈な勢いで高速道路網の整備が進んだことが分かる。

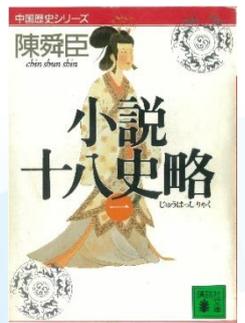
* * *

5月31日 09:51 新神戸駅についた。社員旅行のはじまりである。私にとっては45年ぶりの神戸である。学生時代に神戸・三宮には2度行ったことがある。1度目は卒論提出時の条件であった土木学会関西支部での発表のため神戸大学へ行ったが、研究室行事としていったので途中の町並みの記憶は全くない。2度目は当時の朝ドラ「風見鶏」でブームとなった異人館巡りである。社員旅行から帰って気がついたことではあるが、①ハーブ園ロープウェイ山麓駅から西へ500m位のところに47年前NHK朝ドラの舞台となり、見学に行った異人館・風見鶏の館があったこと、②私の好きな作家である陳舜臣が少年時代を過ごした海岸通五丁目は、今回の社員旅行での立ち寄り先の一つであるハーバーランドから4~500mの位置であったことが分かった。こういう状態を“後の祭り”とはいうが、祭りである限り後始末は必要であると思い今回の旅行にまつわる補足をしたい。



* * *

[^{ちん しゅんしん}陳舜臣] 1924年神戸市生まれ、原籍は台湾台北県、『枯草の根』で江戸川乱歩賞、『青玉獅子香炉』で直木賞、『諸葛孔明』で吉川英治文学書を受賞。『阿片戦争』、『中国の歴史』、『小説十八史略』などの中国歴史を描いた作品は不朽のロングセラーとなっている。(講談社文庫の著者紹介より)



十八史略とは、「中国の歴史読本。曾先之撰。史記から新五代史までの17の正史に宋史を加えた18史を取捨選択して編集した入門書。日本には室町中期に伝来(デジタル大辞泉：小学館)」である。陳舜臣の本は氏の該博な知識を加えてこれを小説化したものであり、日本の社会人が中国の歴史を学びなおすには最適な本であると思う。

神戸市観光局のホームページ「神戸のとびら」をみると、今年2月に”陳舜臣生誕100年記念ミステリーツアー<作品風景から見る神戸の町の歴史>3コース”が開催されたことが分かる。社員旅行には当然間に合わなかったが、神戸市らしい素敵な企画である。

今回の旅行コースの一つであった“ハーバーランド”付近のことを、陳舜臣は自著『神戸わがふるさと』のエッセイ「神戸港」で次のように書いている。

『神戸は昭和の初めごろまで、神戸駅、楠公さん(湊川神社)あたりが中心であった。市役所も裁判所もその一帯にあった。それが外航用の港湾設備や大阪の牽引力によって、重心がしだいに東へ移ったのである。神戸の表玄関は神戸駅ではなく、三ノ宮駅になってしまった。高架線になる前の三ノ宮駅は現在の元

土木屋の読書と旅 (23)

令和6年7月

町駅にあった。駅まで東遷したのだ。私が少年時代をすごした海岸通五丁目は、西から東への都心移行の中間点であった。我が家から歩いて西へ楠公さんに行くのと、東へメリケン波止場に行くのとは、ほぼおなじ距離であった。そてはとりもなおさず、少年時代の私の行動半径にほかならない。』

* * *

新聞書評欄で『神戸、書いてどうなるのか』安田謙一(ちくま文庫 2024年6月10日発行)が目にとまる。著者は神戸で(1962年に)生まれ、十年ほど京都で過ごしたもの、今も神戸で暮らす「ロック漫筆家」。「神戸」をテーマに「ガイドブックに載らない神戸案内～エッセイで街の暮らしと記憶をかたる」の帯が呼んでいる。見開き2ページ毎のショートエッセイ集。目次をみると第三章には陳舜臣『神戸というまち』p.150、淀川長治 p154…と続く。早速購入し、p.150から読み始める。『随筆集『神戸というまち』は著者(陳舜臣)自ら” 実感的神戸論と語るめっほう面白い神戸の本だ。…



「神戸の町の性格をひとくちで言えば、その海洋性の明るさにある。といっ

てもよいだろう。裏返していえば、陰翳の欠如であろうか」/「伝統の重圧がないから、新しいものを取り入れることが容易だった。刀よりピストルの方が便利だと分かれば、誰憚ることなく、刀を捨てることができたのである。ときには、かわりにすてる刀さえ、はじめからなかったのだから、よけい都合がよかった』

『開化の門である神戸の人間は、新しいものにたいして、一種の鑑定人たることを要求された。では、鑑定の基準がなにか? —これはおもしろい。 —これはおもしろくない。伝統の尺度がない以上、個人の実感に頼るほかなかった。』 陳舜臣は二〇一五年一月二十一日、老衰のため九十歳で亡くなられた。』

* * *

ハーバーランドから見た神戸ポートタワーの立つ突堤の反対側がメリケン波止場である。昭和20年代生まれには、何故かしら郷愁を憶えるネーミングである。NHK朝ドラ「ブギウギ」の主人公福来スズ子(笠置シズ子)の先輩茨田りつ子=淡谷のり子の戦前の大ヒット曲に「別れのブルース」がある。

『窓を開ければ港見える メリケン波止場の灯が見える 夜風潮風恋風のせて

今日の出船はどこへ行く むせぶ心よ はかない恋よ 踊るブルースの切なさよ』

YAHOO! JAPAN 知恵袋に、「別れのブルース」で出てくるメリケン波止場とは何ですか?という問いがあり、ベストアンサーは「Zーおじ」さんのつぎの回答であった。

⇒皆さんのおっしゃるようにメリケン「AMERICAN」のことで、メリケン波止場とはアメリカなどの外国船が入り出す港のこと。実際に「メリケン波止場」と呼ばれたのは神戸の鯉川河口に作られた波止場で、すぐそばにアメリカ領事館があったことからこの名が付きました。阪神淡路の大震災で崩壊したため、現在ではメリケンパークの中にその名を残しています。…と、長々と書きましたが、実は別れのブルースに出てくるメリケン波止場は神戸ではありません。作詞の藤浦洸氏と作曲の服部良一氏、両巨匠がこの曲の想を練ったのは横浜の本牧ふ頭だったのです。だから、窓を開けて見えた港は「本牧」ということです。

この歌を聞いた人が思い浮かぶ心象風景の港の波止場でよいと私は思うのではあるが。 古谷 健